

福島県南相馬、宮城県へ ボランティアにいらしてきて

2014年9月26日～28日のレポート

2014年10月10日 郵政産業労働者ユニオン練馬支部 吉澤 利夫

甚大な被害をもたらした東日本大震災から3年半が過ぎました。今でも24万7千人が厳しい避難生活を強いられている岩手、宮城、福島の被災地3県。原発事故が重なる福島県はその内の半数以上の12万5千人が避難生活を強いられています。今年も昨年に続いて被災者への支援を行っていくためにボランティアに6人でいらしてきました。今回は毎回参加している5人に加えて被災地に行くのは初めてという人もいました。この6人で二泊三日の日程で福島県南相馬と宮城県名取市にいらしてきました。このボランティアに向けて練馬局に働く労働者、練馬区内に働く郵政労働者、郵政産業ユニオン東京地本の支部代表者会議で募金を訴えました。その結果、約80名から100,000円集まり、この募金で米や味噌等に換えて仮設住宅で生活している被災者に届けてきました。

今回も夜に出発して朝には着いて2日半は行動できるようにするために26日の0時に練馬駅北口ターミナルを出発。新聞にも報じられたように9月15日から国道6号が原発事故で通行規制されていたのが解除され、一般の人でも通行できるようになりました。通行できれば国道6号を走っていても朝には南相馬に着けると判断し、高速道路を使わずに行くことにしました。深夜の運転は極度の疲れがでますので2時間走ったらコンビニで休憩するパターンで走り続けます。朝の4時を過ぎた頃に休憩をとろうとしたのですが、コンビニがなかなか見つかりません。この時間は車内の会話も弾まずに極度の睡魔が襲ってきます。それでも5時頃にいわき市神谷にあるドトールコーヒー店が見つかり、ようやく30分の休憩をとることができました。運転手の鈴木さん、横山さんは「この1時間はどこもあいていなくて探すのに苦労した。それでも何とか見つけることができ安心した」と言っていました。全員が同じ思いです。30分間では充分といえない休憩を取った後、眠い目をこすりながら5時半過ぎに出発。広野町辺りの海岸沿い道路を走っていたときには太陽の光で海は輝いているように見えました。この時間帯になると私たちが走る2台の前と後には車はほとんどなかったのですが、通勤する人が一気に増えてきました。その中には原発事故の収束作業にあたっていると思われる労働者を乗せたバス等もありました。車はこれから南相馬までの間には原発事故で避難している大熊町、双葉町の14キロ区間があり、この区間は放射線量が高いためにバイク、自転車、徒歩は禁止で車だけが通れるところです。この14キロ区間が通れることで他の道路に大きく迂回することなく走れることになり約1時間短縮になったのです。通れるとはいっても放射線量が高いことには変わりはありません。9月13日の福島民報は、14キロ区間の平均線量は3、8マイクロシーベルト、大熊町の福島第一原発付近は毎時17、3マイクロシーベルトと報じています。除染しているとはいえ高い放射線量であることには変わりありません。国道6号から横道に入る所には人間の背丈以上の高い鉄柵で通行止めされています。早朝にこの区間は通過したのですが、朝の太陽の光にこの鉄柵は不気味に反

射していました。この区域を抜けてそのまま走っていきますと田んぼの中には車が横転し、船も陸上げされたままであり、家は一階部分津波でがら空きの家、物を販売していた店も震災のときのままの状態の店が目飛び込んできます。この状況は一昨年、去年のままです。この町並みを走り続けてようやく7時過ぎに南相馬ボランティアセンターに到着しました。

「すき家」で朝食をとった後に横山さんは原町にある橋本町児童館センターにいきます。そこで模型電車を走らせるジオラマを昨年に続いての作成です。今年中には完成させると言って張り切っていました。他の5人は浪江町、小高町の視察です。今回の案内人は漁業組合の組合員で、この地域で「憲法九条を守る会」をやっている66歳の志賀さんです。志賀さんは9時半から14時半過ぎまで5時間にわたって案内してくれました。浪江町に入る場合には事前に町役場から発行する許可証が必要です。そこには入る日にち、車のナンバー、車種、車色、参加する氏名が記載されています。それを進入禁止の看板のところ立っている監視員に掲示し、許可されると初めて入ることができるのです。その許可証は浪江町に住んでいる人でなければとれません。2週間前にボランティアセンターから連絡し、志賀さんが浪江町役場からとってくれたのです。このように事前に連絡して許可書をえなければ浪江町には入れないのです。それだけこの町はいまだに放射線量が高いのです。

志賀さんは海岸にいくまでに橋の上で説明を始めます。「原発事故によって私たちの暮らしは破壊されています。避難生活を余儀なくされている人の中には原発に賛成していた人が多くいます。あのときに自分は反対しておくべきだったと多くの人が悔やんでいます。自分は漁業組合の組合員で自分以外はみんな原発の誘致に賛成だったのです。これを誘致するときの漁業組合の大会が約30前に開かれました。そのときに自分は「これは大事なことであり賛成、反対を主張する学者先生の話聞いてから判断するべきだ。それぞれの立場の意見を聞かないまま成り行きだけで決めるようなことはしないほうがいい」と提案し、その大会での決定を延期させました。組合長から「賛成、反対の意見を聞く集会を開くから反対する人であなたが推薦する人はいないか」と言われたので安齋さんを紹介しました。後に賛成する学者、反対の学者を呼んでの集会が行われました。賛成の御用学者は名前を忘れたけども東電が言っていることと同じで「安全、安全」を盛んに話していました。反対した学者は安齋郁郎さん（現在・立命館大学平和ミュージアム名誉館長）が話してくれました。自分はそれまでは何となく反対という考えからその話しによって原発は技術的にも完成されておらず安全ではないことを知り、確固たる確信になりました。しかし、その後は東電等から組合員に金がばらまかれて漁業組合の大会で原発を誘致することが決定されたのです」と悔しかった思いを話してくれました。



続いて志賀さんは広大な農地を指して説明します。「ここは農地です。この一面は震災前の今頃は稲が黄金色に輝いていました。しかし、3年以上も農業ができなかったために雑草が人間の高さにまで生えています。雑草だけではなく根っこをもつ樹木が何本も生えてきています。ここでは農業を再開するめどは放射能によって全くできていません。向こう十数年できないでしょう。例え再開できるようになったとしても根っこをもつ樹木を掘り起こさなければならないから大変です。高齢化も進んでいますし、若い人は放射能で帰ってこないでしょう。このままいったらこの町はなくなってしまうのではないかと心配しています」と言って海岸に近い請戸小学校を案内してくれました。

その学校は青いペンキが塗られていて比較的新しいのですが、近づくると津波で破壊されたままになっています。学校の壁には車が津波で流されて衝突したままのものもあります。志賀さんは「この学校は平成10年に電力会社の資金で作られた新しい学校です。ここは津波がきたときの状態のままです。学校の体育館には当時の卒業式の予定表が書いてあります。津波は6メートルを超えて2階の教室の黒板の下まできました。これが津波を示す線です。この黒板にはここを訪れた人が何を書いてもいいということから激励の文を書いてくれています。このように黒板全面はビッシリ埋まっています。1階の給食室に大小の金属でつくられた様々な用具がありますが、津波はそれを飲み込んで一箇所の物置に押し込んでしまいました。この小学校は校長先生が地震の起きた直後に避難指示を自分の判断で出し、津波が来る前に避難させてケガ人を出すこと無く全員無事でした。避難させる指示が少しでも遅れていれば多くの犠牲者がでたことでしょう。この学校は地震、津波の恐ろしさを後世に伝えていくために残すことが決まりました。子どもや先生、職員の誰か犠牲者がでれば壊すことになったと思いますが、犠牲者が誰も出なかったことから親の希望で残すことになったのです」と言っていました。この話を聞いて宮城県の気仙沼では津波で何キロも奥に陸あげされた大型船・第18共徳丸を残すことに住民が反対したために残念ながら撤去されましたし、南三陸町の庁舎も撤去されたことを思い出し、後世に残すことの意義を改めて強くしたのでした。学校にはグランドピアノとアップライトピアノがあり、その両方に触れた越川君は「グランドピアノは音がでなかったけどもアップライトピアノはきれいな音がでた」と言っていました。海岸に近いところを車で移動していると、ところどころに陸揚げされたままの大きな漁船が目に入ります。それは以前と同じです。一昨年、昨年あった大きな壊れた家数軒は撤去されて更地になっていました。そこには家の基礎部分が残るコンクリートと人間の高さ以上の雑草が荒涼と広がっていました。



続いて車は浪江町商店街に移動します。浪江町の中心街である駅とその周辺は昨年と全く変わりありません。人が住めなくなると町は荒れ果てます。去年は地震によって家が崩れたものがそのままあったのですが、危険防止のために撤去されたそうです。そうした家がなくなったことで町全体の整理はすすんでいるのですが、一時帰宅は許されてもここでは生活できませんから「死んだ町」になっていました。駅の隣にモニタリングポストがあったので放射線量をみると0、68マイクロシーベルトでした。私たちがもってきた線量計で地面や雑草の部分にあててみると3、30マイクロシーベルトでした。町で設置しているモニタリングポストはコンクリートの上で1メートルの高さにあることからこのような放射線量になっていると思うのです。あるいは町のモニタリングポストは放射線量が高くてもそのまま反映されないようになってきているのかもしれませんが。地面や雑草の放射線量をみて速く退散しなければと思ったのでした。ちなみに新聞によりますと東京都内の新宿区の平均は0、060マイクロシーベルト、埼玉県さいたま市の平均は0、048マイクロシーベルトです。普段私たちが生活しているところよりも高い放射線量になっているのが分かります。

志賀さんは続いて浪江町役場を案内してくれました。町役場の役員と懇談してほしいというのです。志賀さんは全国からくる視察者を必ず町役場の担当者に紹介し、懇談を行っているというのです。視察者に町役場の担当者が現状を説明させることに重要な意味があると判断しているのです。最初の頃は懇談ができなかったのですが、何回も行っていくうちに町役場も理解を示し慣例になっているそうです。町役場は私たちがイメージしていたものとは違って鉄筋コンクリートで作られた新しいものです。一階の広いフロアには比較的若い男女数人が働いていました。私たちが入っていきますと志賀さんは危機管理担当の山本さんを紹介してくれました。

山本さんは「浪江町の被災状況及び復興への課題」という資料をもとに次のような説明がされました。「現在浪江町は帰宅困難区域ですが、現在3000人います。その内7割は町を復興させていくための作業員、3割は居住者になっています。作業員、居住者もここでは寝泊りできませんから仮設住宅からの通いです。役場の職員も仮設住宅から通っています。震災後営業できていなかった会社や事業者の再開は現在13事業所になっています。町役場としては平成29年3月までにインフラ整備をして町民が帰ってくるようにしたいと考えています。原発事故は今も続いており、汚染除去作業を行っても原発事故を収束させない限り放射能は出続けています。しかし、町としては復興させていくために日にちの目標を設定しないと動きにならないので平成29年3月としているのです。町役場と



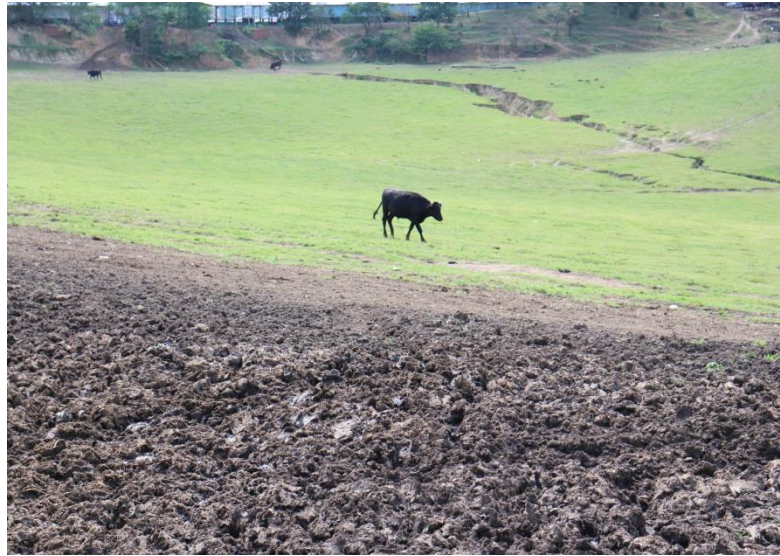
しては昼間帰宅している人への対応と原発事故への対応とで両方課せられています。原発で何かあれば3000人を即避難させる等の対応もしなければなりません」というものでした。説明後私たちは「ここにきている私たちは郵便局で働いていますが、浪江町郵便局は閉鎖されていました。郵便はどのようにしているのですか」と訊きますと、山本さんは「原町郵便局の方から届けられてきているので町役場の仕事に支障はありません」と答えていました。次にモリタリングポストについて訊いてみました。「浪江駅のモリタリングポストは0、68マイクロシーベルトでしたが、私たちがもってきた線量計で地面、雑草の部分にあてると3、3マイクロシーベルトでした。こんなにも差が出るというのはどうしてなのでしょう」と訊くと、山本さんは「風の強さ、風の弱さ、下の位置、上の位置によって数値は違ってくるのです」と答えていました。私たちは実際の数値が正しく反映されないようにモリタリングポストに手が加えられているのではないかと、という衝動にかられました。しかし、黙って聞いていました。山本さんは疲れている様子でしたし、懇談した時間も経ってきています。他にも訊きたいことがあったのですが、これ以上山本さんの仕事の時間をとっては申し訳ない、という気持ちにもなったのでした。最後に「今後も頑張ってください」と声をあげて町役場を後にしました。

次に志賀さんは「希望の牧場」を案内してくれました。牧場に行く途中で子どものイノシシ3匹が道路を走っていくのをみました。背中にある濃茶の線に可愛さを感じましたが、これが大きくなっていくと獰猛になっていくのですから複雑な思いです。ここではイノシシが増えて人間を怖がらずに平気で道路にでてくるようになって困っているといいます。そういえば原発事故で避難している家は人間が住めなくなっているためにネズミが増え住める状態ではないという話も聞いています。イノシシ、ネズミが増え人間が益々住めなくなっていくのかと心配になります。「希望牧場」は震災と原発事故によって酪農で飼っていた牛を殺傷せずにこの牧場に集めて飼育しているところです。「希望の牧場」を案内する小冊子は、「警戒区域内では福島第一原発の事故発生前、牛約3500頭、豚約3万頭、鶏約44万羽を飼育。事故後その過半数が餓死したとされ、生き残った家畜については、国の指示で地元自治体が殺処分を実施している。2011年7月、豚や鶏は、ほぼ殺処分が終了。牛は、餓死でも殺処分でもない第三の活かす道を望む約20軒の農家が売りものにならなくなった被ばく牛約1000頭の飼育を続けている」と書かれています。牧場主の吉沢さんは毎週金曜日に行われている原発反対の官邸前行動に時々きています。「希望の牧場」と書かれた車を運転してマイクで訴



えているのを見たことがあります。牧場はすり鉢場になっていて広大な緑と牧草があります。そこ

で牛たちは自由気ままに被ばくしている草を黙々と食べています。牛もどのくらいの被ばく量になっているかは分かりません。人間が食べることができない牛ですからここで死ぬまで安らかな日々を送っています。私たちを迎えてくれたのは若い女性3人と犬2匹でした。犬がもう1匹いたそうですが、里親がみつきり引き取ってくれていったそうです。女性はこの牧場の記録や家畜が死んでいる写真等を展示している資料小屋を開けてくれました。その写真の一部には牛小屋の柵から頭を出した数頭の牛が骨になっている様子のもがあります。おそらく餌を求めて頭を出したままに死んでいったものと思います。牛は餌を求めても食べられず、酪農家は牛に餌を与えることができなかったことが一目でわかります。この写真は私たち人間に問いかけています。`あなた方によってこうなったのだ`と。



原発事故による被害は人間だけではなく牛や豚、鶏にまで広がっているのです。牧場主の吉沢さんはここで寝泊まりしているそうですが、女性3人はボランティアで牧場を維持するために通ってきているそうです。吉沢さんは「希望の牧場」を開くときに警察からここを出るようにと何回も言われてきましたが、「命のある牛の世話は誰がやるのか」と問答し、ついに警察も言わなくなってきたそうです。要するに警察は根負けして事実上居住を認めた形になっているのです。今回、牧場主の吉沢さんは東京にいく用事があって残念ながら逢えませんでした。が、「希望の牧場」の活動を私たちは何らかの形で支援していきたいものです。

志賀さんはその後、小高地区を案内してくれました。小高駅周辺は浪江町と同様に危険防止のために壊れた家は撤去されて道路脇はきれいになっています。町並みはきれいになっていますが、人は住んでいませんからゴーストタウンになっていることに変わりはありません。時々工事用の重機の高音が聞こえるのと信号機の点滅が目につくだけです。前回写した位置で今回も同じ位置から写真を撮ります。小高の駅前にある自転車置き場の自転車の数は震災時と変わりありません。小高駅前にある豪邸は一昨年、昨年と同じようにロープが敷かれたままです。小高郵便局は窓口業務を再開して1年半になっていますが、社員はどのような状況で働いているのか気になります。昨年と同じように話をしたかったのですが、今回は時間の関係でやめました。

原発は事故が起きればとりかえしのつかないことになることを浪江町、小高の町をみれば分かります。あれから3年余になります。しかし、町の様子は全く変わりません。戻ろうと思っても戻れないのです。健康上のことを考えれば戻れませんから避難先で生活の基盤ができれば戻る必要はありません。今後はそのように考える人は益々多くなり、そのまま町は縮小してしまうことが考えられます。

志賀さんの案内による視察者が今年は昨年よりも多く1300人を超えてと言っていました。私たちがくる数日前には東京多摩関係の学校の先生たちがバスできてくれたそうです。今後も年内の予約が次々入ってきていると言っていました。視察での案内は手弁当で約5時間にもわかりました。請戸小学校と希望牧場の視察、浪江町役場との懇談は今までになかったことです。そういう点では従来にない視察ができて志賀さんには本当に感謝です。志賀さんは案内をしている車中でも様々な話がされました。ボランティアセンターの宮前さんの話と含めて今の福島状況を列記します。

○原発事故を収束させるための作業員には1人当たり東電から危険手当を含めて37、000円支給されています。しかし、実際に作業している人には13、000円で全員が非正規雇用です。その間には下請け、孫請けが数多くあり24、000円がピンはねされています。ここでも原発をつくった会社が利益をあげ、事故があれば収束作業で利益をあげている構造があります。作業場は放射線の強い悪労働環境のもとで働いているために死亡、重症、事故が多発しています。新聞（赤旗10月4日）によりますと、一日あたりの作業員数は3100人から5700人になっている。昨年度の事故は32件で震災前の2倍、今年度は8月末の時点で36件にもなり、事故の件数は増えていると報じています。数ヶ月前に報じられたNHKスペシャルは、チェルノブイリ原発事故の収束作業と福島の原発事故の収束作業をとりあげていました。それによりますとチェルノブイリ事故の収束作業に携わる作業員には国家が責任をもって労働者を雇用し、賃金もロシアの一般的な労働者よりも高い賃金で健康管理も随時行っていました。家族の社宅も設けて安心して作業に従事できているといいます。そして、原発を完全に取っ払っていくための行程で欠かせられない技術の継承も行っています。国家をあげて取り組まなければならないことを政府の担当者は述べていました。原発作業員も登場し、「給料は他と比べていいし、健康管理の面でも安心して作業ができています」と言っていました。福島では東電まかせで国をあげて収束させる作業をしていません。賃金も大企業が儲ける仕組みがつけられ現場の一線で作業している人は全て非正規労働者です。一定の放射線量を超えれば辞めていかなければなりません。そして、常に新しい人が雇用されているために収束させていくための技術が継承されていないといいます。事故を起こした原発を廃炉させていくためには大変な労力と時間が必要なのに日本はロシアに比べてあまりにもずさんであることを明らかにしたのです。廃炉への計画として東電は使用済み燃料プールの取り出しは1号機、2号機で2017年から始めて2020年に終了、燃料デブリの取り出しは2021年から始めて2036年頃に終了、原子炉建屋の解体は2036年から始めて2051年に終了という行程ですが、技術者の継承がされていないために現状では困難ではないかと報じていました。私たちは政府が国策として原発を推進したことから原発事故の収束作業は東電任せにするのではなく政府が責任をもってすすめていくよう求めていく必要があります。



○福島原発事故によって海には汚染水が放出され、地球的に放射能が広がっているのに危機管理が全くないことにも呆れます。毎週金曜日に行っている官邸前行動でインド、ドイツ、トルコ等からきた人が訴えていました。「この原発事故は日本だけの問題ではないのです。放射能は空と海で全世界に広がり地球的になっています。原発事故の早期収束と原発のない社会を実現しましょう」「原発をインド、トルコに輸出しないで下さい」と話していたのを思い出します。原発は事故を起こせば日本だけの問題ではないのです。

○震災があった東北3県の中で震災後は福島県が震災、原発事故関連で最も自殺者が多く出ていることが内閣府の発表で明らかになっています。震災では宮城県が最も犠牲者が多かったのですが、2011年6月以降になりますと福島県は2011年6月～12月10人、2012年13人、2013年23人、2014年11人（9月末現在）で計57人になっています。他の県では震災関連の自殺者が減っているのに福島県が増え続けているのは原発事故による将来の生活への不安、原発事故の収束が一体何年かかるのか分からない不安、いつ自分の家に帰れるのか分からない不安、なれないところでの生活で精神的にもストレスが極地に達している、20年後、30年後のがんや白血病におびえる等によって自殺に追い込まれていることが考えられます。後でもふれますが、国道6号を走って宮城県に入りますと町の様相が大きく違ってきます。宮城県は津波で破壊された町は更地になっていますが、その地から離れたところの家には住民が生活しているのが分かります。福島の浪江町、南相馬は大きな家があっても住んでいないのです。町の様相を見ただけでも違うのが分かります。

○飯舘村では除染作業が行われました。約360軒あり、360億円が使われました。しかし、原発事故は収束していないために放射能はふりまかれたままです。再び同じところを除染作業しなければならなくなっています。飯舘村に360億円も使われるのであれば1軒1億円を支給し、別のところに移って生活できる資金にしたいと言っているそうです。原発事故による除染作業でも大手の会社が請負、それを下請け、孫請けにだしている構造になっていますが、大手の会社が汚染作業でも利益を追求できる仕組みがつくられているのです。大手の会社（大成建設等）は、原発を作ったときに利益をあげ、事故が起これば収束作業で利益をあげ、汚染処理でも利益を上げられる仕組みがつくられているのです。

○漁業の話もされました。秋の魚と言えばさんまですが、福島県と宮城県の間にある海域が最も獲れるということで漁業者はその海域で獲っています。同じ海域で漁を行っているのに福島県に陸揚げすると1キロ90円にしかならないのに岩手県に陸揚げすると1キロ150円になるといいます。金額でこれだけの差がうまれるというのは風評被害がまだ終わっていないということです。これは余談ですが、私たちは東京に帰るときに道の駅でお土産や課物等を買います。6人とも福島産の物を買いました。私はこの時期としては珍しい桃と今が旬のなしを買いました。桃は4個入っていて630



円、なしは小さめの物が6個入って300円でした。家に帰って家族で食べたところ全員に喜ばれました。福島県で農業、漁業に携わって頑張っている人への支援はこういう形でも続けていきたいものです。

○6年後の2020年に東京オリンピックが行われます。「震災復興の姿を世界に示す」、「原発事故の汚染水はコントロールできている」と安倍首相はIOCで明言しました。しかし、福島原発事故は全く収束するどころか汚染水の垂れ流しは続いていますし、厳しい避難生活を強いられている人が12万人以上にもなっています。「震災復興の姿を世界に示す」というのであれば原発事故を収束させるのと震災復興を第一にする政治を行うべきです。今のままの状態ではうわべだけの虚言にしか聞こえません。

行動2日目の27日は、宮城県名取市の仮設住宅に炊き出しの応援に行ってきました。原町のボランティアセンターから2時間ほどかかるということから朝早く発ち、現地には9時20分ころに到着。宮城県労連は震災後、様々な取り組みを行っていますが、現在は県内の仮設住宅で生活している人への炊き出しを冬の寒い時期を除いて毎月行っています。今回で30回目、ここ名取市箱塚グランド仮設住宅には4回目です。私たちはテント貼りから支援物資の米、果物、お菓子、学用品の4種類をスーパーの袋に入れて準備しました。これをこの仮設で生活している119軒に届けます。そのときに仮設住宅集会室前で餅つき、うどん、お茶、コーヒー、ポップコーン等を用意し、労働相談、生活相談、トランペットの演奏も行っていますと説明します。11時過ぎになると仮設住宅で生活している人が次々集会室前に顔を出してつきたての餅、うどんを自宅にもっていく人、テントのところに設けた椅子に座って演奏を聴いていく人等で人の輪ができてきました。利用する人が多かったこともあって餅とうどんは12時半ころにはなくなってしまいました。行事を行っている途中で東北の地で頑張っている郵政産業ユニオン組合員の斉藤君が差し入れをしてくれました。今日は深夜明けでこの日の夜も深夜の勤務に入るといことです。斉藤君は「東京から支援にきてもらってありがとうございました。皆さんに元気をもらいました」と言ってくれました。全ての行事が終わった後に簡単な反省会が行われました。仮設住宅の自治会長さんは、「町の復興が遅れているために仮設住宅から出られない人が多くいます。これまで何回も支援にきていることへの感謝と今後も私たちを忘れずに復興に向けた支援をお願いします」という話がされました。実際、国道6号で福島県から宮城県に入る海岸沿いを車で走っていきますと更地のままです。今後の復興計画はどのようにしていくべきか、高台に住宅地をつくっていくためにはどのようにしていくべきか等の懇談が続けられているようです。住民の声を聞いて復興をすすめるようにしてもらいたいものです。もう一つ気がついたのが福島県は原発事故で復興に向けた取り組みがすすんでいないために町の様相は震災時のままになっているのに宮城県はそれ



なりに復興しているのが分かります。福島県は二重苦のためにまだまだ先は遠いことを実感します。この日の行動では宮城県労連等から多くの参加があって80人にのぼりました。これは責任者から聞いた話ですが、これを行うのにテントはリース、支援物資等をそろえると1回行うのに40万～50万円はかかるそうです。県労連としては被災者支援活動を基本においていることから台所事情は大変の様ですが、被災者が元気になればという位置づけで続けているといます。全労連から支援カンパが寄せられないと継続できない、とも言っていました。次回は10月25日、場所は検討中だそうです。私たちは被災者への支援活動と共に、政府に復興事業はスピードをあげるよう強く求めていく必要があります。

南相馬への帰りに横山さんが行っている橋本町児童館センターに寄り、ジオラマの完成状況を見ることにしました。現地において驚いたのは地元のMさんが昨日からきて本格的に行い出したということです。Mさんはその手のプロでこれまで作ってきたものを修正すると言い出して最初からやり直すことになった。横山さんは少しでも早く完成させて子ども達に喜んでもらいたいと思っていたのですが、Mさんはつくる以上は極めて芸術性に近いものをつくりたいらしいのです。横山さんとしてはMさんが地元の人ですし、しかもプロということから今後は任した方がいいと判断したといます。

児童館の帰りにここに設置されてあるモニタリングポストを見ました。放射線量は0、158マイクロシーベルトでした。しかし、私たちが地面等に線量計をあてると倍以上の0、33マイクロシーベルトでした。学校を終えて帰宅するまでの時間帯を子ども達は児童館で何時間も過ごします。この地域全体がこの数値であることが人体、特に子ども達にどのような影響を与えていくのか気にかかる場所です。



ボランティアセンターに着いてビックリしたのが長野県と岐阜県の県境にある御嶽山が噴火したニュースです。この山は日本百名山の一つで急登がなく登りやすい信仰の山です。そのために子ども達もよく登っています。この静かな山が突然噴火し、次々と犠牲者がでているのですから驚きです。これに関連した新聞記事によりますと日本は火山国であり、活火山が110、噴火に警戒が必要な火山が47もあることです。鹿児島県の川内（せんだい）原発を再稼働すると安倍内閣は言っていますが、噴火が頻繁に起こる桜島が近くにあるというのに何を考えているのだろうか。いや何も考えていないからできるのだろう。「人の命よりも金のためか」と怒りを新たにしたのでした。

行動3日目の9月28日は帰る日ですが、午前中仮設住宅への訪問をしました。この日は朝8時からNHK「小さな旅」で福島の南相馬が取り上げられていたので全員で見ました。番組ではボランティアセンターの宮前さんの知っている人が次々登場し、震災と原発事故で大変な中でも南相馬を盛り上げていくための取組みが自然の風景と合わせて報じられました。その一つに農家民宿があります。農家民宿は震災前には10軒ありましたが、震災後の現在は5軒で営業を再開しています。再開するにあたっては様々な苦労があったようです。番組ではこの地域独特の手料理を振る舞っていることを伝えています。日々の仕事に追われ肉体的、精神的疲れの癒しを求めている人にはこの農家民宿の利用をすすめます。私たちも今度来るときにはこの民宿に一泊したいと思ったのでした。

その後、最後の行動として仮設住宅寺内権現沢への訪問です。スーパーの袋に米、味噌、タオル、生活相談を知らせるチラシを入れて訪問し、様々な要望を聞くのです。仮設住宅の外では子どもが5～6人で遊んでいる声が聞こえました。ここの仮設には子どもをもつ家庭が何軒かあるようです。不在のところがあったのですが、訪問すると会話が弾みます。私たちが「東京からきました。生活物資を届けに来ました」とあいさつすると、「わざわざ東京からご苦労様です」と言って話しを聞くことができました。その中の要望等を列記します。

「仮設住宅に住み続けているけどもいつまで住み続けることができるか不安。別のところに行かなくても復興は遅れているし、どこにもいけない。ここは粗末なつくりで3年半も経っているからカビがでてくるのが困る」

「小高に家を新築したのだけれども原発事故で住めないからここにいる。住めないものだから家の中はカビだらけになっている。だから住んでいないのに一年中冷房を入れて喚起している。その電気代が大変な金額になっている」

「復興に向けて努力をしていると政府は言っているけども、大臣が一度でもここに来て私たちの話を聞いたことがない。近くまで来てそのまま通り過ぎるだけです。それでは私たちの生活のことなんか分からないですよ。福島を忘れないでほしい」

「国道6号線は開通したかも知れないけども、放射線は高いので自分の子どもを連れて走る気にはならない。原発事故を収束させなければどうにもならない」

「復興は遅れているし、仕事はない。朝から何もすることがないのでついつい酒を飲んでしまう。こんな生活に自分になるなんて思ってもみなかった」

等です。



東京に帰る時間の関係でここに住んでいる全ての家庭に支援物資をわたすことはできませんでした。2人一組で36軒の家庭を訪問することができました。訪問して要望等を聞いて思ったことは、福島の実状は繰り返しになります。原発事故が重なっていることもあって他の2県よりも復興が遅れているということです。そうした中でも私たちが訪ねていくとおばあちゃんが「東京からきてくれてありがとう。若いのにご苦労様」と言って健康ドリンクをサービスしてくれました。仮設住宅での生活は隣近所に気を使い、壁一つしかないためにプライバシーが守られないことからストレスがたまります。そういう中でも仲良く生活していくしかない、とのおばあちゃんは言っていました。現状は大変であるけども何とか暮らしを再建させるために頑張っていることをその笑顔から伝わってきました。

憲法13条は個人の尊重と幸福を追求する権利を保障し、憲法25条は人間が最低限度の生活を営む権利を保障しています。しかし、被災地では人間らしい普通の生活が保障されないまま3年半が過ぎています。私たちは引き続き避難生活を余儀なくされている人への支援と共に、政府には原発事故を早期に収束させ震災の復興を速めていくよう強く求めていく必要があります。

午後1時に南相馬を出発し、帰りは富岡インターから常磐高速に入って一路帰路につきました。途中の道路脇にモニタリングポストがあり、そこには2、65マイクロシーベルトになっていました。休憩した四倉のサービスエリアで自動販売機等に線量計をあてたところ3、44マイクロシーベルトでした。この数字をみてここは放射線量が高いことを改めて知らされました。

車中では今回の反省と来年の日程も決めました。毎回いっているボランティアセンターは今後も3年間活動を継続していくとしています。一泊はボランティアセンターに泊まり、もう一泊は南相馬の農家民宿とすることを検討し、日程は9月25日（金）～27日（日）とすることとしました。来年も新しい人が参加して東北の被災地に支援する輪が広がるようにしていきたいものです。行きも帰りも終日車を運転してくれた鈴木さん、横山さんありがとうございました。

○農家民宿は夕食、朝食の手料理がついて6500円です。

申し込みをする場合は「南相馬市ふるさと回帰支援センター」電話0244-24-5555

○「希望の牧場」への募金は、ゆうちょ銀行 口座名義・希望の牧場福島プロジェクト
記号一番号 10140-59459781

○ボランティアセンター 電話0244-26-8880 宮前さんが代表

